

第6回 市内出土の亀ヶ岡式土器—東北地方との関係を示す形と文様—

読者の皆様は、亀ヶ岡遺跡をご存知でしょうか？ 亀ヶ岡遺跡は青森県つがる市に所在し、東京国立博物館に所蔵されている、遮光器土偶しやこうきどぐうが出土したことで有名です。今回取り上げる亀ヶ岡式土器とは、この遺跡にちなんで名づけられた、東北地方を中心とする縄文時代晩期の土器群の総称です。美しく装飾された工芸的な土器で知られており、北海道の渡島半島おしまから東北地方全体で出土します。亀ヶ岡式土器の文様は、その分布圏を越えて、日本列島各地の縄文土器に影響を与えました。土浦市内でも、遠く東北地方で流行した形や文様を持つ土器が発見されています。

下坂田に所在する下坂田貝塚では、後期の貝塚とともに、晩期の遺構と遺物が見つかりました。①はそこで出土した注口土器ちゅうこうで、三叉文さんさもんという、亀ヶ岡式土器でよく用いられる文様が施されています。亀ヶ岡式土器と呼ぶにはちょっと厚すぎ、形も整っていませんが、東北地方の影響を強く受けていることは確実でしょう。

上高津貝塚C地点では晩期の住居跡や土坑が見つかり、亀ヶ岡式土器も出土しています。②の注口土器は文様こそないものの、その器形は東北地方の晩期初頭から前葉の土器とよく似ています。底が欠けており、少し尖った底部だったと思われます。

神立平遺跡かんだつたいらは神立に所在する、縄文時代後期を中心とする大集落です。工場内の施設建設に伴い発掘調査が行なわれた結果、30軒の竪穴住居跡や199基の土坑が見つかりました。③は晩期の住居跡である第3号住居跡から出土したものです。口縁部と底部を欠損していますが、晩期中葉の壺と思われます。その薄さや縄文の細かさ、整った形は、本場の亀ヶ岡式土器と比べても遜色のないものです。

これらの土器は、縄文時代晩期の社会が閉鎖的なものではなく、人や物、そして情報の行き来があったことを物語っています。そして、これらの土器が出土した遺跡では、いずれも塩づくりに特化した土器、製塩土器が出土しています。当時、霞ヶ浦で生産された塩や塩づくりの方法は、遠く東北地方まで伝えられたのかもしれませんが。



①下坂田貝塚出土 ②上高津貝塚C地点出土 ③神立平遺跡出土

※「未来への伝承」『広報つちうら』平成26年12月上旬号を一部修正のうえ掲載※